

集団への適応を支援する

2011/04/03 今治セミナー
NPO法人つみきの会 藤坂龍司

1. どの集団を選択するか

健常の子どもたちの集団か、障害を持つ子どもたちの集団か

①就園段階（3、4才）

ロバース博士はまず家庭で半年から1年間、集中的に療育を行なってから、付き添い（シャドー）付きで徐々に健常児の集団の中に入れて行く、という方法を取った。→19人中9人が「正常機能」

＜健常児の集団（プリスクール）にこだわった理由＞

障害を持つ子どもの集団では、よいモデルがないから



大幅な改善を目指すのであれば、早期療育の段階では、障害を持つ子どもの集団（通園施設など）は避けた方がよいだろう。

ただただ健常児の集団にほおりこめばよいというものではなく、最初はシャドーなどの援助が必要

②就学段階（6、7才）

普通学級、特別支援学級、特別支援学校。どれも一長一短あり、一概に言えない。

就学判定は必ずしもあてにならない。従う必要もない。

	メリット	デメリット
普通学級	健常の子どもたちと共に学べる	いじめを受けやすい
特別支援学級	健常の子どもたちとの交流の機会	支援が不足しやすい
特別支援学校	手厚い支援	健常の子どもたちと接する機会なし

＜親の付き添い付きで普通学級へ、という選択＞

わが家では、中程度の知的な遅れ（DQ50～60）を伴う自閉症の娘に、幼稚園から母親が「シャドー」として付き添い、小学校、中学校を普通学級の中で過ごした。

よかった点

健常の子どもたちと同じ充実した教育を受けることができた。

子どもをぬるま湯につけることなく、いろいろなことを体験させることができた。

よくなかった点

いまでも親の援助をあてにしている。

高校からは特別支援学校に進むが、そこで果たして一人でやっていけるのか、不安（教室の移動、自由時間の過ごし方、困ったときの対処など）。

2. 集団に入れる前の準備—家庭でできること—

(1) 個別療育

ABAに基づく家庭療育で、社会適応に必要なスキルをできるだけ身につけさせる。

- ・動作模倣（人の動きをまねできる。周りの動きに合わせて動く）
- ・音声指示（先生や友達の指示を聞き取り、それに従って動ける）
- ・ことば（自分の意志を言葉で伝えることができる。簡単な会話ができる）
- ・身辺自立（トイレの自立、食事スキル、着替え、手洗い）
- ・アカデミックスキル（読み書き算数）
- ・運動スキル（走る、飛ぶ、ボール投げ、なわとび、鉄棒、飛び箱）
- ・ルールのある遊び（おにごっこ、かくれんぼ）

(2) サークルタイム（学校ごっこ）

家族やセラピストが先生や生徒役になって、学校ごっこをする。

入園・入学前だけでなく、入園・入学後に園・学校生活と並行して行ってもよい。

例えばお母さんが先生役になり、おじいちゃん、おばあちゃん、お兄ちゃんと子どもが生徒役になる。

誰か一人、子どものそばについて、プロンプトと強化を行なう。

生徒役は先生と一緒に輪になってすわるか、先生と向かい合って横並びに座る。

<教えること>

- ・先生の全体への指示に反応する
- ・先生の言葉をよく聞いていて、自分に指示が向けられた時に反応する
- ・先生や友達の動きに注意し、模倣する
- ・勝手に離席せず、姿勢を維持して、待つ
- ・教室での様々な活動に従事する

お絵かき、工作

絵本の読み聞かせ

列に並んで、順番になわを飛ぶなど

クイズ・なぞなぞ（手を挙げて答える）

室内ゲーム（ボーリングゲーム、カルタ、トランプなど）

分担と協力を必要とする活動（そうじ、共同制作など）

(3) ピアトレーニング

お友達（ピア）を家に招いて、遊び相手になってもらったり、サークルタイムに協力してもらう。

最初は一人だけ招く。大人がそばについていて、遊びを提案したり、子どもをプロンプト・強化する。

一対一でうまく関われるようになったら、徐々に招待する人数を3，4人にまで増やして行き、サークルタイムを行なったり、自由に遊ばせたりする。

ただしあまり自由にさせると、あなたの子どもをほおっておいて家のゲームで遊んだりするので、注意すること。「うちの子を仲間に入れることがうちで遊ぶ条件」ということを明確にする。

3. 集団での援助

(1) シャドー（付き添い）

ロバース博士は、子どもを健常児の集団の中に入れるとき、セラピストを「シャドー」として付き添わせて、必要な援助を行なわせた。

つみきの会ではセラピストの代わりに親が「シャドー」として付き添うことが多い。

<シャドーの役割>

自閉症児は、環境の変化に弱い。一つの環境で学んだことをすんなりとは他の環境に般化できない。

そこで家庭療育で身につけたことを、集団の場面で十分に発揮できるように、プロンプト&強化をするのが、シャドーの役割。

<園・学校がつける介助員との違い>

園がつける介助員は、安全確保だけのことが多い。何かを教える権限も能力も持っていないのが普通。

家庭での ABA 療育の効果を集団生活にフルに生かそうと思うなら、①ABA の基礎を身につけ、②子どもが家で何を学び、どこまでできるのかをよく知った人間がシャドーとして付き添う必要がある。親が自らセラピーを行なっている場合は、親がシャドーとして付き添うのが一番。

<親がシャドーになるメリット・デメリット>

(メリット)

・自ら家庭療育を行なっている場合は、子どもが何ができ、何ができないかを熟知しているので、必要な時に過不足のない援助（プロンプト）を行なうことができる。（介助員だと子どもの状態を知らないため、援助過剰や援助不足になりがち）

- ・園や学校で、子どもができなかったことを課題として家に持ち帰り、家で教えることができる。
- ・子どものことを最後まであきらめないのが親である。

(デメリット)

- ・子どものことを客観的に見れないことがある。
- ・感情的になり、つい口を出しすぎたり、叱りすぎたりしてしまう。
- ・子どもが母親を意識しすぎて、力を発揮できなかつたり、過度に依存してしまうことがある。
- ・いつまでも子どもと思ひ、引き際が適切に判断できない。

<シャドーの心得>

☆当分の間（少なくとも一学期は）、子どもにぴったりくっついておくこと

学校はすぐあなたを子どもから離そうとする。言われるがままに教室の隅にいと、翌週は「廊下から見ていて下さい」、さらに翌週は「もう来なくていいですよ」となる。

プロンプトも強化も、即時に行なうことで初めて効果を発揮する。即時に適切な援助をするには、子どものそばにしている必要がある。だからシャドーのいるべき場所は教室の隅ではなく、子どものそばである。

☆いつ、どの程度子どもから離れるかは、あなたが決めること

シャドーは永久に子どものそばにいるべきではない。あくまで自立が目的なのだから、自分でできることはだんだん自分でさせるようにするべき。つまりプロンプト・フェーディングが必要。しかし援助を控えるようになってからも、しばらくの間はいつでも援助を再開できるように、そばにいる必要がある。学校の言うままに、子どもから離れるのを急ぎすぎると、必要な援助ができなくなる。

☆学校のやることに口を出さない

学校や教師は批判を嫌う。長くシャドーをやっていたと思ったら、学校や教師がすることに口を出

したり、注文をつけたりしないこと。「そばにいさせてくれるだけでいいです」「いつもすばらしい教育をして下さってありがとうございます」という姿勢が大切。先生には一杯お世辞を言って、自分と子どもを好きになってもらおう。

☆学校で見たことを他の人に話さない

学校はプライバシーにうるさい。あなたが教室で見たことを他の親に話したら、それは巡り巡って学校の耳に入る、と思った方がいい。そうするとあなたの立場は悪くなる。どんなにおもしろいことがあっても、どんなに言語道断なことがあっても、家族以外には話さないこと。

☆声かけは少なく

口数を少なくして、必要最小限の指示を小声で言う。あとは無言の身体プロンプト（肩や背中を軽く押して促すなど）をして、できたら小声でほめる。

☆遊びは積極的に

遊び時間、休憩時間こそ、シャドーが必要。お友達との仲立ちをして、あなたの子どもがみんなの遊びの輪の中に入れるようにしよう。

(2) 先生を通しての支援・家庭での支援

親が付き添いできない場合は、担任の先生や介助の先生にお願いするしかない。

「がんばりノート」などの支援ツールを使って、先生の「ほめる」行動を強化しよう。

がんばりノート（4月3日）	
授業中におしゃべりしない	
先生がお話ししているとき先生を見る	
お友達に声をかける	